

オーブンから四年 大槌町こどもセンター

岩手県大槌町からの報告



岩手県大槌町教育長
伊藤正治

まもなく、あの震災大津波から5年目を迎えようとしています。復興事業も徐々に進み、大槌町こどもセンター開設時とは周辺の様子もかなり変化しました。野球場やテニスコートが姿を消し、復興住宅や一般の住宅が数多く建設され、県立病院建設工事や道路工事の音が響き、大型ダンプがひっきりなしに往来しています。そんな寒空の中、子供たちが頬を赤くしながらも笑顔で元気に子どもセンターにやってきます。

現在、こどもセンターには72名が登録しており、平均すると毎日30名近くの子どもたちが、それぞれの目的を持ち意欲的に活動しています。

こどもセンターでは昨年度から、体験活動や学習活動のプログラムが位置づけられ、個々の興味関心に応じた取組が行われております。子どもたちは、来館してくると、まず最初に学校から出された課題や自分で決めた一人学習等を30分ほど行い、その後は遊んだり、センターで実施されるプログラムに参加したりします。遊びとしては、室内での卓球・トランプ・ボードゲーム、屋外では鬼ごっこ・大縄跳び等です。

プログラムではバイオリン教室・書道・切り絵・ペーパークラフト等多様な活動が用意され、センターのスタッフや地域の方々、支援をしてくれている方が優しく丁寧に指導してくれています。これ以外にも、高校生も取組に参加し地域のお兄さんお姉さんとして子どもたちと交流してくれ、楽しい時間を過ごすことができます。

プログラムの中でも特に人気なのが「バイオリン教室」で、2年生から5年生までの7名が毎週火曜日と木曜日に1時間から1時間半ほど練習を行います。普段は元気いっぱい走り回っている子たちも、このときは真剣に練習し、今では演奏できる曲数も増えてきました。昨年は、支援団体の公演の賛助出演やクリスマスコンサート等で地域の方々の前で発表するなど、子どもたちの自信と希望を大きくふくらませる良い機会も得ることができました。バイオリン教室は参加している子どもたち以外にも良い影響があり、バイオリンの練習をしている間は、練習の邪魔にならないように静かに活動できるようになりました。

こどもセンターは学校の長期休業中の期間も開設されており、夏・冬・春の長期休業日にもほぼ毎日子どもたちが来館できるようになっています。いまだに児童生徒の3割が仮設住宅で過ごしている状況において、センターは、学校以外で唯一子どもが子どもらしく、のびのびと思い切り活動できる場所として非常に重要な場所となっております。

このように、子どもたちはあの東日本大震災津波を経験したことで、未だに心に不安を抱えながらも元気に活動できているのは、パレスチナ子どものキャンペーンの御支援の賜物であるといえます。

今年の9月に子どもたちが待ち望んでいる大槌学園（小中一貫校）の新校舎が完成しますが、新しい環境が整っても子どもたちの心の不安はすべて解消されるわけではありません。我々、教育行政に携わる者として、今後も子どもたちの健やかな成長と幸せのために、こどもセンターのスタッフ、関係機関の方々と連携しながら力を尽くしてまいります。（2016年2月8日）



地域の方々に見守られて